



## 講演 英米法研究会

# 法律を学ぶキミたちへ

～ 夢に向けて 最高のスタートを～

桜が散り、季節も春から夏へ変わるところ、新入生の関心も大学生活に関する漠然としたことから具体的な将来のことへ変化している。中央大学学友会学術連盟・英米法研究会では年に2回、学内外から講師を招き、学生を対象とした講演会を開催している。

### ■英米法研究会

中央大学英米法研究会は長い歴史を持つサークルで、当研究会だけが、日本で唯一「英米法」について学ぶサークルである。中大の前身は「英吉利法律学校」といい、英米法の研究者が開校した学校のため、その伝統の精神が根付くサークルと言える。

主な活動としては、国外法ゼミ、国内法ゼミ、講演会、OB・OG会、

模擬陪審裁判、機関誌発行などの活動から、合宿、その他イベントなど、学びと遊びを両立したものが多数ある。

それらの活動の基盤には、数百人規模の会員と様々な分野の情報、公認サークルならではの会室や設備がある。試験や進路についての情報が欲しいという方、人脈を広げたいという方、仲間と学び、遊びたいという方はぜひ、英米法研究会(サークル棟4433)まで。



5月14日に行われた今年度第1回講演会では新入生の進路決定や今後の学習に関する不安を解消し、将来の見通しを立ててもらおうと、2人の弁護士を招き、お話を伺った。テーマは「夢に向けて最高のスタートを」

今回お話を伺ったのは弁護士の大山晃平先生と秋山俊先生である。

先生方には弁護士を志したきっかけから伺った。

**一弁護士を志した理由と時期を教えてください**



**大山先生** 「この講演会のお話をいただいてから実家の方に確認したのですが、中学校の卒業文集に弁護士になりたいと書いてありました。当時はドラマの影響といったような短絡的な動機だったと思うのですが、大学3年のころに祖父が亡くなり、相続でもめたことをきっかけに本格的に法曹を目指し始めました」

**秋山先生** 「私が弁護士に興味を持ち始めたのは中学3年生のときに、『だから、あなたも生き抜いて』

(大平光代著＝弁護士)を読んだことです。その他、法律に関するテレビ番組などからも影響を受けました。高校のときに実際に家族で弁護士の先生にお世話になりました。その時に他人から見ると、些細なことでも当事者にとっては思いの外、重大な問題であると実感しました。そんな当事者をそばで手助けできる弁護士という仕事は素晴らしいと思い始め、大学に入るころには、本格的に弁護士を目指すようになりました」



## 講師プロフィール



### 大山晃平氏

早大卒、慶大大学院法務研究科法務専攻修了。2009年9月、司法試験合格。2010年12月、弁護士登録。2011年1月、八王子ひまわり法律事務所にて弁護士就任。



### 秋山俊氏

明大卒、明大法科大学院卒業。2014年9月、司法試験合格。2015年12月、弁護士登録。2015年12月、八王子ひまわり法律事務所にて弁護士就任。

**一お2人とも大学時代には既に法曹を目指していたとのことですが、在学中はやはり勉強を中心とした大学生活を送っていたのでしょうか？**

**秋山先生** 「大学1年生のころは、そんなに切羽詰まって勉強はしていませんでした。勉強と言っても2種類あって、大学の単位を取るための勉強と司法試験に向けた勉強があります。大学の単位を取るための勉強というのは正直なところ、そんなに

必死になってやっていたのかなと思います(笑)」

**大山先生** 「どっちにしても目指す以上はどこかで本腰を入れて司法試験に向けて勉強しないとイケませんからね。しかし司法試験の勉強だけではなく、特に1年生のうち是一般教養とかそのような科目もぜひ積極的に学習することをお勧めします。弁護士になってからも必要ですからね」

**一司法試験の勉強に本腰を入れてからはどのように勉強していたのですか？**

**秋山先生** 「予備校の講義を私は受けていたんですけど、中央大学だと炎の塔や多摩研究室というのがあるので、あまり予備校に通われない方が多いという話を聞きました。全然それでも問題なくて、予備校は予備校のいいところがあって、もちろん悪いところもあるので、結局のと



ころは人それぞれだと思います。大切なのは先輩に聞くなどして、自分にあった勉強法を早く見つけることです。中央大学のように学内に充実した勉強の場があるなら、それを大いに活用するということが大事です。1人で勉強していると、今の勉強法が果たして正解かどうか分からず、勉強の方向性を間違えてしまうと後からそこまでの時間が全て無駄になってしまったように感じることもありますからね。せっかく学内に勉強の場があるので、先輩や友達と相談しながら勉強を進めていけたら良いと思います」

—お話を聞いていると毎日勉強で大変だったと思うのですが、勉強の合間の息抜きはどうしていましたか？

**大山先生** 「お酒を飲んでいた記憶しかありませんね(笑)。友人と会っていろいろな話をして、お酒の力も借りながら嫌なことを忘れて勉強を頑張っていましたね。1年生に話すようなことではないかな(会場笑い)

**秋山先生** 「勉強自体は好きではありませんが、法律の勉強はあまり苦には感じませんでしたね。だから勉強ばかりしていました。遊びの記憶はあんまりないかもしれません。遊びといってもカラオケ・マージャン・ビリヤード・ボウリング…(会場笑い)。勉強で忙しいからと言わずに友達付き合いから学ぶこともたくさんありますから、友達からの誘いを断らないということは大事ですかね」

次に法曹界で活躍されているお2人に、弁護士の仕事について伺った。

—弁護士になってから一番苦労したことは何でしょうか？

**大山先生** 「一番苦労している、と言いますか毎回苦労しているのが初めて会う相談者の方と信頼関係を築くことです。信頼関係がなくてもしっかり仕事をすればいいだけではないか、という人もいますが、時には依頼者を説得する必要もありますので、そうはいきません。重要だからこそ、これからも信頼関係を築くことには苦労していくのだろうな、とは思いますがね」

—弁護士の仕事のやりがいはなんですか？

**大山先生** 「弁護士が裁判官・検察官と大きく違うところは依頼者がいる、という点です。弁護士に仕事を依頼するというときはトラブルにあったときです。依頼者の皆さんが事務所の扉を開けるときは困った顔をしてらっしゃいます。そんな依頼者のおみなさんに事件を解決した後、笑顔になっていただけること、これが一番のやりがいですね」

秋山先生 「企業に入って会社のために何かする、ということよりも目の前の依頼者の力になれる、ということがやりがいにつながっていると思いますね」

次に会場から質問を募った。

**参加者** 「無罪を主張しているが、

自分としては絶対に有罪だと感じる被告人の刑事弁護をする事になったらどうしますか？」

**秋山先生** 「まず、弁護士は依頼人の有罪無罪を判断する裁判官とは違いますので、依頼者である被告人が無罪を主張しているなら、まず無罪を主張します。有罪になるような証拠が出てきたりした場合は依頼者に『最後まで無罪を主張すると、反省の態度が見られない、と判断されて不利益になる可能性がある』と説明します。しかし、それでも依頼者の方が無罪を主張する、と言えば無罪を主張しますね」

—最後に講演会に来てくれた1年生に何か一言お願いします。

**大山先生** 「私たちは多摩の一弁護士に過ぎません。弁護士に限らずたくさんの人からお話を聞いて自分の進路を決めていただけたら良いなと思います」

**秋山先生** 「司法試験に合格することが大きな関門となりますが、不可能なことではありません。ただ、努力しなければ不可能です。自分には無理だ、と諦めることなく頑張ってください」

今回の講演会ではお2人の弁護士の先生方から貴重なお話を伺うことができた。これを糧に英米法研究会会員はもちろん、中大生には将来に向けて一層精励してもらいたいものである。